

2012年11月30日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 長島敏樹 様

2012年度 海外認定研修 報告書

桜美林大学図書館
三上 彰

調査・研究テーマ：『インドネシア大学図書館の図書館サービスの現状調査』

訪問先：インドネシア大学図書館

訪問日：2012年9月5日（水）～9月6日（木）

・はじめに

2012年夏にインドネシアジャワ島のジャカルタを訪れた際に、インドネシア大学（Universitas Indonesia）の図書館を見学し、図書館サービス（利用者サービスや資料の提供・保管方法等）の現状を、図書館のスタッフへの聞き取りも含めて調査を行なった。インドネシア大学は、首都ジャカルタの南部にある国立大学で、学生数や教育・研究の質等がインドネシアではトップクラスの大学である。学生時代にゼミ等でフィールド調査を行っていた際に何回か利用したことがあったが、今年の春に新しい中央図書館が落成・開館したというタイミングであり、図書館サービスの現状を調査するには良い機会であったと感じている。以下では、前半で新しくなった図書館の概要等についてふれ、後半では資料の提供方法や資料の保管・管理の様子、利用者サービス等について、報告させていただきたい。

・インドネシアの高等教育・大学の概要

インドネシアの教育制度は、日本と同様の6・3・3・4制が基本になっている。ただし、家計の状況などから小学校や中学校へ通えない子どももいる。近年は高等教育機関への進学者も増えてきているが、高等教育機関における就学率は、国全体では約20%であり、周辺国のマレーシアやタイなどと比べるとまだ高くない状況である。インドネシアの高等教育機関には5種類のものがあり、職業教育を提供するアカデミー、ポリテクニク、職業教育と学術教育を提供する単科大学、インスティテュート、総合大学がある。2009年度現在で、国立と私立の5種類の高等教育機関をあわせた総数は約3,000で、400万人を超える学生がこれらの高等教育機関で学んでいる。総合大学は、国立大学が48、私立大学が約400で、合計で約450の総合大学がある。

・インドネシア大学（Universitas Indonesia）の概要

インドネシア大学（Universitas Indonesia）は、医学、歯学、公衆衛生学、看護学、数学と自然科学、工学、情報学（コンピュータ）、法学、経済学、人文学、心理学、社会学・政治学の12の学部を持ち、学部と大学院あわせて約13,000人の学生が在籍していて、今までに40万人以上の卒業生を輩出している。キャンパスは、ジャカルタの南の郊外のデポック（Depok）とジャカルタ中心部のサレンバ（Salemba）

に2つのキャンパスがある。メインキャンパスは320ヘクタールの広大な敷地を持つデポック・キャンパスで、大半の学生はここで学んでいる。デポック・キャンパスは、キャンパス内に移動用のバスが走っているほどの広さで、キャンパスの約25%を学生の教育・研究活動に使い、残りの約75%は緑や自然を残すことになっている。キャンパス内には、8つの大きな池（大学のHP等では湖と称している）があり、国立公園と言っても良いくらい自然にも恵まれている。今回見学・調査を行なった新しい中央図書館もデポック・キャンパスにある。

・インドネシア大学図書館の概要

インドネシア大学の新しい中央図書館は2011年5月に開館した。図書館全体の蔵書数は約150万冊である。新図書館は“Crystal of Knowledge”『知識の水晶（知識の結晶）』と名づけられ、見る角度によってその姿が大きく異なる、独創的なつくりの外観になっている。写真①のように池の対岸から眺めるとガラス張りの面が多く、石のタイルとの組み合わせになっている。写真②のように反対側から眺めると小高い丘のように見える。別の側面から眺めると写真③のようにも見えるものである。池に面した側は写真④・⑤のようになっており、建物前の高い木の周囲は学生たちが集まって談笑する広場になっている。



写真① 大きな池の対岸から眺めた新図書館



写真② 写真①と反対側から眺めた新図書館
右端に見えるの建物は、大学の本部棟



写真③ 写真①・②とはまた別の角度から眺めた
新図書館



写真④ 新図書館の池側の出入口付近の様子



写真⑤ 新図書館の建物の池側にはカフェなどもある

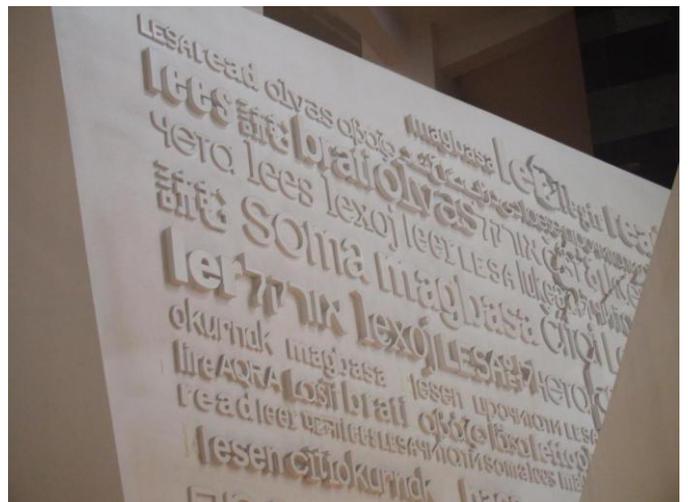
新図書館の建物は地上 8 階建てで、床面積は約 33,000 平方メートルにおよぶ。この建物の図書館部分は地上 1 階から 4 階までであり、丘の上に突き出たような部分には会議室等がある。館内で使用する電力等のエネルギーは、太陽光発電を多く取り入れ、環境負荷を軽減するよう工夫されている。この新図書館の完成によって大半の学部の図書室は新図書館に統合されたが、情報学など一部の学部の図書室は別に存在している。それまでのメインだった図書館の建物は教室などに転用されているが、一部のフロアには、参考図書、閲覧席、検索用パソコン等が置かれており、図書館の機能も果たしている。

・図書館内の配置等について

新しい中央図書館は、その外観の独創性にまず驚かされるが、建物内の 1 階の図書館の入口周辺には、写真⑥・⑦のように、“baca”（バチャ：読む）、“read”という言葉を経々な言語であらわしたオブジェが配置されている。



写真⑥ 建物内部の図書館の入口付近の様子



写真⑦ 様々な言語による「読む」という言葉をあらわしたオブジェ

館内のフロアは、写真⑧のフロアマップに示されているような円形の一部をくり抜いたようなかたちで、2階から4階に閲覧席や書架が配置されており（写真⑨）、書架部分は写真⑩のようにそれぞれがさらに2層に分かれているところが多くなっている。建物の外観から想像がつくように、下のフロアは広く、上のフロアほど狭くなる構造になっている。増え続ける資料の保管スペースを確保するために頭を悩ませている図書館が多い日本の現状と比べると、何とも贅沢な空間の利用方法と思われた。インドネシアは、国全体としては数千の島と広大な国土を有するが、都市部は人口密度が高く、日本以上に住宅が密集している地域もある。首都のジャカルタも人口が多く、ジャカルタの中心部と比べてもこのキャンパスは贅沢なものと考えられる。



写真⑧ 館内のフロアマップ (2階)



写真⑨ 館内の閲覧席と書架 (2階)



写真⑩ 2層になっている書架 (3階)

館内の上下階の移動には、階段のほか、写真⑪のように吹き抜け部分に長いスロープも備えられている（バリアフリーという点では、もちろんエレベーターも備えられている）。館内には、トイレはもちろんであるが、イスラム教のお祈りをする礼拝スペースも備えられている。館内の1階には、メインのカウンターや荷物のロッカー、写真⑫のようなパソコンコーナーなどがある。



写真⑪ 長いスロープと閲覧室



写真⑫ 約 200 台のパソコンを備えたパソコンコーナー (1 階)

2 階から 4 階の書架と閲覧室は、それぞれいくつかに分けられて分野別やコーナー別となっていて、書架の中にもところどころに閲覧席があるかたちである。一般の図書の分類方法は基本的にデューイ分類法を用いて、分類にもとづいて複数のコーナーにまたがって配架されている。一般の図書以外のコーナーとしては、雑誌・新聞等の逐次刊行物のコーナー、東洋学関係資料のコーナー（主に韓国と日本の資料がある）、卒業論文・修士論文・博士論文などの論文を保管しているコーナー、貴重資料を保管する貴重書室等がある。後述するが、一般の書架の資料の保管状態は、残念ながらあまり良く手入れが行き届いている感じではなかった。

2 階には、写真⑬・⑭のような博士課程の大学院生向けの研究個室（約 100 室）もある。インドネシアの教育政策として、「大学教員の質の向上が学生の教育の質の向上につながる」という考え方があり、2005 年に制定された教師・大学教員法によって、修士号や博士号を未取得の大学教員には取得をすすめている。図書館内を案内してくださったクララ (Klara) 氏の話では、博士課程の大学院生には博士号を早く取得してほしいという願いなどから、このような一見贅沢に見える研究個室を用意しているとのことであった。



写真⑬ 博士課程の大学院生用の研究個室 (2 階)



写真⑭ 博士課程の大学院生用の研究個室を上から眺めた様子

・図書館エリア以外のキャンパスと、キャンパス周辺の様子について

新図書館の建物の1階（図書館外エリア）には、カフェ、レストラン、書店、旅行代理店なども入っており（写真⑮・⑯）、カフェは談笑する学生たちで賑わっていた。キャンパス内には、学食のほか、飲食物を販売する小さな店や屋台などが多数あり、いずれも学生たちで賑わっていた。



写真⑮ 図書館の建物の1階（図書館のエリア外）にあるカフェ



写真⑯ 図書館の建物の1階（図書館のエリア外）にある書店

複写（コピー）に関して、コピー機は館内やキャンパス内にあるが、いずれもセルフコピーではなく、コピーの担当者が利用者の申請に応じて行なうかたちである。図書館内では、著作権などに配慮してコピーの上限枚数などが定められている。キャンパスの最寄り駅近くには、文房具屋、古本屋、コピー屋などが所狭しと軒を連ねており、大学のロゴの入った文房具、Tシャツ・ジャケット・帽子などを販売している店もいくつかあった。こちらも学生たちの人通りが絶えない感じであり、活況を呈していた。

・資料の提供方法や保管方法の実際的なところについて

図書館の資料の提供方法や保管方法等について、先に概要を述べたが、実際的なところについてもう少し詳しくふれていきたい。資料を保管している書架は、写真⑰のようにスチールの柱と板の組み合わせという感じ（スチールの柱を組み立てて、本を並べる棚として板をわたしているだけのようなもの）で、柱の色はグレー一色であり、ビジュアル的に目をひくようなものではなかった。自動書庫や集密書庫などは備えておらず、貴重資料以外の一般資料は全てが開架の状態で見られる状態であった。



写真⑰ スチールの柱と板で構成されている書架

各書架には、ここにどのような資料があるのかを示すサイン（分類番号等）が掲示されているところが少なく、書架が入り組んでいるところでは、そこに配架されている資料の続きがどこになるのかということがわかりにくいところもあった。また、書架の裏側には基本的に背板のようなものがなく、本を押し込み過ぎたら後ろにそのまま落ちてしまう構造であった。周囲に柱もない最上段の棚にも本が並べられていて、ブックエンドがない棚も多く見受けられた。日本と比べると地震が頻繁に起こることはないであろう（ただし、インドネシア大学があるジャワ島は、地震が起きやすいアルプス・ヒマラヤ造山帯に属しており、私が学生時代に滞在していたときにも地震に遭遇したことがある。また、2004年12月には、大きな津波等で甚大な被害の出たスマトラ沖地震も起こっている。）が、地震の対策がとられているようには思われなかった。棚の手前に安全バーがついていたり、棚板がすべりにくくなっているということもなかった。これから長く使うことを考えると、地震への対策は必要なのではないかと思われた。

雑誌等の逐次刊行物のコーナーでは、利用の多いと思われるタイトルの雑誌は面見せの書架（写真⑱）に配架され、新聞はソファタイプの閲覧席近くの棚に配架されていた。バックナンバー等の配架されている書架を見てみると、2000年代前半で受入が途切れてしまっているのではないかとと思われる資料が多数見られた。日本の大学の紀要なども複数見受けられたが、一部の年代のものが置いてあるだけ、というものが多かった。選書・収書方針などについてこみいった質問をすることはできなかったが、寄贈されてきた紀要などの逐次刊行物については、たまたまあるもの（寄贈されてきたもの）をそのまま置いているだけではないか、という感じであった。



写真⑱ 閲覧席の間に配置されている面見せの雑誌架

図書や雑誌等の資料の保管・管理という点では、資料が倒れたままであったり、乱れたかたちで置かれている書架も見受けられ、全体的に書架の整理・整備を頻繁に行なっている感じではなかった。一般の資料の保管・保存の状態はあまり良い状況ではないと感じざるを得なかった。

2階の貴重書室の資料は、その一部を見学させてもらうことができたが、空調で温度・湿度が調節（一般の閲覧室よりも低い20℃前後の温度設定）され、室内の明るさも資料を傷めないように暗めのものになっていた。木片に文字の記してある数百年前の資料や手書きの原稿類などが保管されており、担当のスタッフも資料の取扱いには慎重であった。貴重資料の扱いは特別という感じで、一般の資料との扱いの差に驚いた。

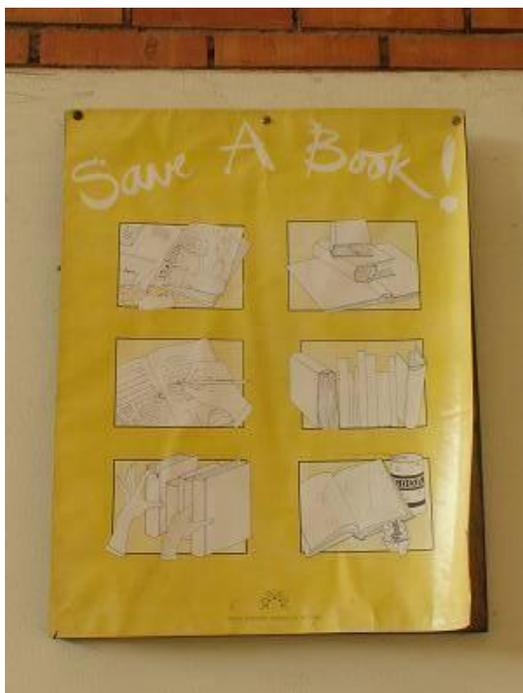
・利用者サービスと Web 環境等について

まず利用者サービスに関して、1階の入口前にメインの総合受付カウンターがあり、予約資料の取り置き等のサービスや、手荷物を預けられるロッカーの鍵の貸出（バッグ等の手荷物を持ったまま館内に入館できないわけではない）、各種の利用案内などを行なっている。館内の書架と閲覧席がある各コーナーには、

それぞれにカウンターがあり、担当のスタッフとそのコーナーの資料の貸出手続きや情報検索・レファレンスなどに用いるパソコン（担当のスタッフ用）が配置されている。案内して下さったクララ（Klara）氏の話によると、職員は全体で約 60 名おり、開館時間（月曜日から金曜日は 8:30～19:00、土曜日・日曜日は 9:00～16:00）にあわせて朝番と夜番で 2 交替で対応しているとのことであった。レファレンスサービスという点では、各コーナーのカウンターで質問をする利用者はまばらな感じであり、質問する人がいない時はスタッフものんびりしている感じであった。このあたりは、常に暑い気候とお国柄が関係しているところである。

次に Web 環境やオンラインサービスに関して、1 階のパソコンコーナーには、デスクトップ型のパソコン約 200 台が完備されている。見学時には多くの学生が利用していて大半の座席が埋まっていた。電子ジャーナルやオンライン・データベースは、EBSCO、PROQUEST、SCIENCE DIRECT、JSTOR 等、約 20 種類が利用できるようになっている（これらは、図書館の HP にアクセスの入口がある）。そのほかに、E メールによるレファレンスなども行なわれている（図書館の Web ページからログインできる学内者限定のもの）。また、図書館のある建物内のみならずキャンパス内は無線 LAN 対応となっており、学生たちが館内のソファや屋外のベンチ、学食等、広大なキャンパスのあちこちでノートパソコンを広げて、Web を利用して調べものをしたり、友人とのコミュニケーションを行なっているような姿を多数確認することができた。図書館としての電子ジャーナルやオンライン・データベースの整備・提供の状況、大学としての Web 環境の整備は、日本の中小規模の私立大学よりも進んでいるのではないかと思われた。

図書館を利用する学生等への注意喚起に関しては、資料への書き込みや切り取り等の禁止を訴えるマナーポスター（写真⑱）や、書架のある閲覧室等での飲食禁止・ゲーム禁止等の掲示（写真⑳）を館内に見ることができた。利用者の利用マナー等の実態についてはたずねることができなかったが、利用マナーを守れない学生や、勉強・研究以外のことを図書館の閲覧室エリア内でやろうとする学生も少なからずいるのではないか、ということ推し量ることができた。



写真⑱ 資料の扱いに関するマナーポスター



写真⑳ 閲覧室内での禁止事項についての掲示

人々がのんびりしていることと時間に対する感覚は、日本人とは大きく異なる部分である。インドネシア人の時間に対する感覚をあらわす言葉としては、“Jam karet”（ジャム・カレット：時間はゴムのよう伸び縮みする）という言葉が有名であるが、図書館で見られる具体的な違いとしては、閉館時刻前でも閉館作業をすることである。19:00 までの開館でも、17:00 過ぎには利用者のいないスペースや利用者が少ないスペースにおいて、利用されていない椅子を机にかけて整えるなどして閉館の準備をしている様子が見られた。私が学生時代に利用した際は、例えば開館時間が 17:00 までの場合には、16:30 を過ぎるとスタッフが閲覧席に残っている利用者に「そろそろ閉館時刻だから、片付けて帰る準備をしてね」と声をかけてまわり、16:45～16:50 頃には蛍光灯なども消灯されてほぼ閉館された状態になり、17:00 の時点ではスタッフもすでに帰途についていて、図書館は完全にクローズされて館内には誰もいない状態、という感じであった。今回は、閉館時刻の 19:00 の時点でもまだ館内には利用者がいて、慌しく追い出される感じではなかったので、以前よりは利用者サービスという視点が備わってきたのではないかと感じられた。

・おわりに

今回は、新しくなったインドネシア大学の中央図書館を見学・調査する機会を得ることができた。図書館のつくりや図書館サービスという点で、日本の図書館と共通する部分と異なる部分、また、学生たちの様子、キャンパスとキャンパス周辺の様子なども見て感じることができ、とても有意義であった。図書館を案内してくれたクララ（Klara）氏と図書館のスタッフたちには、この場を借りて感謝申し上げたい。

日本国内において近年に新図書館を竣功・オープンした大学では、図書館内に飲食できたりくつろげるカフェなどを併設したり、ラーニング・コモンズをはじめとした学習スペースを設けており、利用者が快適に過ごせる空間や多様なニーズに応えることが必要であると考えられる。また、図書館の役割として、現在の日本の図書館では、資料の保管・保存よりも、利用者サービスや利用者教育にウエイトが置かれるようになってきていると考えられる。しかし一方で、日本の現状では、土地などのスペースや予算に制約があることが多く、新図書館をつくるような場合でも、デザインはともかく、少しでも多くの資料を保管できることや機能性にウエイトを置いた図書館をつくらざるを得ないと考えられる。資料の電子化が進んできていると言っても、資料を保管・保存する場（書庫）としての役割は重要であると考えられる。私が奉職している大学の図書館でも、いずれ新図書館のことを考える時期がくると思われるが、資料を保管・保存するという従来からの図書館としての変わらぬ役割と、利用者が快適に利用できる場としての図書館、学生や教職員、近隣地域の利用者など、幅広い利用者の多様なニーズ、今回の見学で目にしたような独創的な外観デザイン等を考え合わせて、調和のとれたものをつくれるように関わっていければと思う。

次回、数年後にでも機会があれば、新図書館オープンの気運が少し落ち着いてきたところで、新図書館の利用状況や機能性、選書の方針等について、インドネシア国内の他の図書館との比較なども交えて、引き続き調査にあたりたいと考える。

参考文献・参考資料

- 1) 服部 美奈 「アジアの高等教育事情 ダイナミック・アジア(9) インドネシア 高等教育の一大市場を形成する底力, 先を見据えた人材育成戦略」『カレッジマネジメント』 28(6), 2010年11月, pp.42-45
- 2) 北村 友人 「アジアの高等教育事情 (1) グローバル化するアジアの大学」『カレッジマネジメント』 27(4), 2009年7月, pp.26-29

3) P. G. アルトバック, V. セルバラトナム編；馬越徹, 大塚豊監訳 『アジアの大学：従属から自立へ』 玉川大学出版部 1993

4) 和気 太司 「グローバル化に対応し大学教員の海外派遣に積極的に取り組むインドネシア」 『留学交流』 2011年8月号 (Web マガジン) <http://www.jasso.go.jp/about/documents/taijiwake.pdf>

5) インドネシア大学 (Universitas Indonesia) HP <http://www.ui.ac.id/>

6) インドネシア大学図書館 (Perpustakaan Universitas Indonesia) HP <http://www.ui.ac.id/id/library/page/pengantar>